

Beyond MDGs Japan 勉強会シリーズ第2弾

「人口及び雇用問題」

オープニング

進行：山田浩司氏<国際協力機構（JICA）企画部 参事役>

皆さん、こんばんは。Beyond MDGs Japan 勉強会シリーズの第2回「人口及び雇用問題」ということで、これから2時間、勉強会を開催させていただきたいと思います。きょうの司会進行を務めさせていただきます、国際協力機構（JICA）企画部の山田と申します。きょうは宜しくお願い致します。

開始に先立ちまして、一つだけ皆さまにご連絡差し上げたいことがございます。きょう、ご参加されているかたがたの中で、恐らく年齢的には一番若いという高校1年生の方がいらっしゃいます。従いまして、あまり難しい言葉を使って質問はなさらないように、発表者の方も、ぜひそのところは心して発表いただければと思います。

それでは、発表に先立ちまして、今回の勉強会シリーズの発起人の1人であり、日本国際保健医療学会の池上清子さんから開会のごあいさつをお願いしたいと思います。池上さん、よろしくお願いします。

池上清子氏<日本国際保健医療学会 代議員>

こんにちは。今、山田さんがおっしゃってくださったように、今日は高校生も大学生もたくさんいらっしゃいますので、楽しく、質疑応答も含めて、勉強会を進められたらと思います。今日は第2回の勉強会です。Beyond MDGs を見据えて、特に、ミレニアム開発目標の期限が終了しますので、そのミレニアム開発目標が終わる本年まで、Beyond MDGs というネットワーク活動を続けてきました。MDGs の先どうなるだろうか？既にSDGs という枠組みは決まりつつあります。そして、この9月の国連総会で採択予定です。そこで、MDGs 見直しについて、そしてSDGs の実施について、どういうことが課題として上がってくるのかについて勉強会をシリーズとして、開催しています。

1 回目は、ユニバーサル・ヘルス・カバレッジがテーマでした。保健医療の一つの方法として提案されているものですが、日本語でも片仮名でユニバーサル・ヘルス・カバレッジとされています。日本語では村上先生、何て説明すれば分かりやすいのでしょうか？

村上 誰もが医療を、要するにお金がない人が受けられないというようなことがなく、受けられる状態というふうに。

池上 ということです。ですから、ユニバーサルに誰でもが医療にアクセスすることを目指すわけですが、お金を払うということを前提にしつつ、かつ、質の高い医療サービスが提供できるか・受けられるかという話です。これが第1回の勉強会でした。

本日は、第2回目です。テーマは人口と雇用問題です。人口問題にご興味を持ったり、雇用問題にご興味を持って、おいでいただいた方もいらっしゃると思いますが、本日の中心テーマは人口と雇用問題を、アフリカと中近東地域で考えるものです。主にアフリカです。アフリカの人口は、今後爆発的に増えていきます。その人口増加は、アフリカ、そして中近東地域の中でみると、人口数の増加という現象にとどまらず、若い人口が多いことになります。その若い人たちにどのように雇用を提供できるのか、せっかく学校に行ったのに仕事がないということになると、結局社会的に開発が進まないというだけではなくて、社会全体の不安とか、テロの根源とか、そういう問題にもつながってくると思います。

そこで、本日はミレニアム開発目標のみならず、開発を考えていく上で、本来、人口動態として分析してみると、開発との関係を考える視点が変わるのかについても、勉強したいと考えております。この視点が今まで、不足していたのではないかと、さらに、雇用との関係を含めて、開発を考える視点を補いたいというところで、勉強会第2回を開催させていただくことに致しました。講師はお二人いらっしゃいますので、ご紹介等を含めて、山田さんにまたお願いをさせていただきたいと思います。よろしくお願い致します。ありがとうございました。

山田 池上さん、どうもありがとうございました。

第1部 講演(1)

山田 それでは、早速きょうの講演のほうを始めさせていただきたいと思います。1人目の発表者ということで、東洋英和女学院大学大学院、国際協力研究科の望月克哉教授にお越しいただいております。アジア経済研究所でずっとアフリカ専門でご研究をなさってこられた方ですけども、今、東洋英和女学院大学に移られて、本日はアフリカの若者の問題ということで発表いただきます。では、望月先生、よろしくお願ひします。

望月克哉氏<東洋英和女学院大学大学院 国際協力研究科 教授>

望月でございます。きょうはこういう仲間に加えていただき、ありがとうございます。今日はこの機会をいただいたので、皆さんと問題を共有していきたいと思っています。

私のテーマは『アフリカの開発課題としての「若者」』とさせていただきました。

本日の問題意識は、ポストMDGsの議論のなかで、人口と雇用という問題を掲げたときに、どこに注目するかです。焦点は若い世代で、「若者(youth)」という言葉をあえて使います。

やはり国連システムを中心に進んできた動きがこの問題を引っ張っている側面はありますので、そのインパクトは何だったのか、ということ。それから、アフリカの「若者」をめぐる問題を皆さんに考えていただきたいなと思っています。国連の取り組みの中では、やはり国連の若者プログラム(Programme on Youth)が中核を担ってきたことは間違いありません。その目的として掲げられているのは、若者のグローバルな状況についての認識を高めるということです。若者たちの権利や願望を前進させて、平和と開発を達成する手段として若者の政策決定

への参加を促進することが書かれています。しかしながら、このプログラムによって、少なくとも若者の参画、特に国連の意思決定のプロセスの中で若者の参画が増えてきたことは間違いありませんし、そういう点ではMNDPの役割なども評価しなくてはいけない、と考えています。

99年、国連総会がようやく動き出し、“何とかデー”を設けて“何とかイヤー”に持っていこうという動きが始まりました。今年もまた8月12日が近づいてきて、学生たちが、周りの人びとにアピールしたものの、ほとんどスルーされています。私自身もそういう取り組みに関わらないうちに年月が過ぎ去ってしまって、95年の行動計画（アクションプログラム）は何だったのかと、自分の中でも考え直しているところですがもちろん、近年は広報活動の面で随分と進んできたとも感じているところです。

一つの大きな転機になったのは、「国際ユース年です」。ここでも「対話と相互理解」が打ち出されたのが非常にユニークでした。つまり、彼ら、若者たちがステークホルダーとして認められ、それが定着してきたのではないかと考えています。これを受ける形で、12年には、1年間のユース年の成果をどう見るかということで、『世界ユース白書 (World Youth Report)』が出てきました。そこで、皆さんにぜひ考えていただきたいのは、ディーセント・ワークという発想です。私自身も、この概念について、まだまだ危ういものと考えています。非常に便利に使われてる面があり、その点もぜひ今日の議論の中で皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。

もう一つ、雇用の問題で言いますと、そこではILOの役割が大きかった。ILOの報告書も、ぜひご参照いただければと思います。それはGlobal Employment Trends for Youth 2012なのですけれども、40ページぐらいの報告書です。国際ユース年を受け、かつユース白書を踏まえて、これはブースターの役割を果たしているのです、国連の取り組みを考える上では非常に有用なものではないかと思っています。

『世界ユース白書』の主張を国連広報センターのプレスリリースから紹介しました。というのは、私自身がどう評価するかというよりは、ユース白書の何を売り込んでいるかということをご皆さんに見ていただきたかったからです。若者は雇用と教育に共通の懸念を持っている、心配をしているのだということ。そして、若者のディーセント・ワークについての格差というのが、非常に拡大していること。これらはわれわれも非常に感じているところですし、ここにいらしているお若い方たちには身につまされる問題としてあるのではないのでしょうか。ディーセント・ワークの中での格差というよりは、若者たちの中での格差意識が広まっているということも事実であろうと思っています。このディーセント・ワークという概念、あるいはそれについて掲げられた目標に対してどういう反応を示していくのか、恐らくこれからも問われていくのだろうと考えています。

しかしながら、このユース白書を読んだときに、何よりも意義があると感じたのは、この白書に世界の津々浦々からの若者たちの声が収録されているということです。そうした若者たちの生の声として、プレスリリースは次のような幾つかの厳しい声を取り上げています。「学業は就職の足しにならなかった。」「資格や認定に過度にこだわり過ぎている。」大学は今や、それを売りにしていますが本当にそれでいいのでしょうか。「仕事があっても安心できない。」

若者たちの離職の問題を考えたとき、それは誰のせいなのかと言われれば、本人たちの問題とは言い切れないように思えます。そして、「働く機会と実力を発揮するチャンスが乏しい。」若者たちは、さまざまなキャパシティをこれから伸ばしていく、あるいはその可能性を追求する世代でありながら、そういうチャンスを与えられていないのではないかと訴えています。そういった声が実は先進国、途上国問わず、収録されているという意味では、この白書の意義とは、まさに若者たちの声を取り上げた、拾い上げたところにあるのではないかなと考えています。

もう一つ、これらの国連を中心とした取り組みの中で、われわれとして考えなくてはいけない問題というのは、Youth Unemployment Crisis という事態です。実際にこうした状況は世界中で起こっている。それによって、若者たちの意欲がそがれ、さらにそれが社会の活力を奪っていくという、今の世界の状況というのをどう見るべきでしょうか。2000年代に入って、やや落ち着きを見せていたようにも見えました。90年代の少し停滞したところから、資源価格の高騰で少し世界の景気が上がってきたところでしたが、サブプライム・ローンをめぐる問題が起こってしまった。この07年に端を発する世界金融危機が、リーマン・ショックというところに続いていく中で、公式統計の上でも若者たちの雇用、あるいは就職率というのはがたがたと落ちていったのでした。私のフィールドであるアフリカでも、若者たちが働く場というよりは、むしろ現金を獲得する場を失っていくというのは非常に顕著でした。09年がピークでその後は回復基調になるのかと思っていたら、実はそうではなく、こうした経済停滞がさらに続いていくことになりました。そして、2011年時点での失業者は率にして12.6%、世界では7500万人の若者が失業者となったのです。ちなみに報告書の中では、ニートはその倍だとか書いてあります。1億5000万のニートが居ることになりますが、実際にはもっと居るでしょう。

ユース白書は、このように回復傾向が見られない中で、MDGsの完成年度であるはずの2015年を越えても、この状況は続くというふうに明確に書いていました。実際にそうだったのです。少なくとも国連システムを支えてきたわれわれは、こういった状況を認識していたにもかかわらず、それに対して手をこまねいていたのではないのでしょうか。サブ・サハラ・アフリカの11.5%という数字を出しても、正直のところあまり意味はないと思います。しかしながら、統計としての意味を云々する以上に、アラブの春を推進した、すなわちそこで世界に対してアピールをした北アフリカの若者たちが世界で一番職を失ったのだという、その事実です。そこにこそ、このYouth Unemployment Crisisという言葉の意味を見いだすべきかもしれません。若者たちが社会を変えようとして動いた、それに対して社会が応えられていない事実。それどころか、若者たちの可能性を奪う兆候すら見えているのだということ、それを世界にアピールしたという点で、このユース白書は重要です。このYouth Unemployment Crisisという看板は、やはりわれわれとしても意識していかななくてはいけないのではないかなと思っています。

私自身のフィールドの話に入りますと、ナイジェリアが私のメインフィールドで、これまで2度、駐在する機会があって、この国の過去30年の変遷を見てきました。そんな中で考えたこと、たとえばディーセント・ワーク、あるいはUnemployment Crisisということについて少し考えてみたいと思います。

私がこの場でお話をさせていただけるのも、恐らく、現在世界7位といわれているような

人口大国であるナイジェリアを見てきたからであろうと思っています。多分この後もセンサスをめぐることが取り上げられるでしょうが、やはり人口大国であればあるほど、センサスというものが非常に政治的な意味を持ち、非常に難しい問題を多く生み出してしまいます。ナイジェリアも独立が1960年なのですが、独立に先立つ時期から植民地支配の下で幾度もセンサスを行っています。より正確に言えば、センサスをやらされてきました。

しかしながら、独立を経て、そこから始まったセンサスの歴史というのは血にまみれ、かつ、国家の混乱を倍加させるような経験でしかありませんでした。こうして1990年代に至り、ようやく長く続いた軍事政権から民政化をにらんだ選挙のためという名目で、91年にセンサスが行われました。私はこの頃ちょうど「里帰り」していたので、このセンサスでカウントされた1人なのですが、その結果として発表された数字は過少だろうというのが、実感でもありましたし、多くの人びとも言っていたことです。センサスをめぐることには、誰かが多く数えられては困るという一面があるのです。特にナイジェリアは多民族国家なので、センサスをめぐって出てくる問題点、とりわけその後控えた選挙というものを考えると、人口をどう数えるかという問題が非常にセンシティブな問題だということが、現地に居てよく分かりました。多くの人がナイジェリアの総人口は1億人は超えてるだろうと思っていました。ところが、最終的にこの91年センサスの結果が出てきたのは92年の後半なのですけれども、「え？ 8899万？ せめて9000万にしろよ」というようなことをわれわれも言っていた覚えがあります。

それから15年後のセンサスになりますと、今度は1億4000万人なり、一気に日本の総人口を超えてしまいました。センサスの合い間に人口を語る際には世銀統計が用いられることが多いのですがあまり正確なものとは言えません。本日、ナイジェリアについて少し知っていただくために最近雑誌に書いた拙文を配らせていただいたんですが、その中では1億7000万超といった書き方をしています。仮に、現地で聞き取りを行ったとして、ナイジェリアのナショナル・ポピュレーション・コミッション、つまり人口センサスや人口問題を統括している組織の人たちに聞いても、大体そんな数値が出てきます。まずは人口大国であるということを強調させていただこうと思います。

まず、本日のテーマとして雇用というものを語る前提として、ナイジェリアで目にした、それが雇用と言えるのかどうか、迷うような状況を皆さんに見てもらおうと思います。これは精米所なのですが、ここで使われているのは昭和30年代か40年代に製作された、日本のサタケというメーカーの機種なのです。撮影したのは、多分2000年代に入っていましたが、まだまだ元気に働いていました。あまりメンテナンスされていないとは見えないのですが、ちゃんと働いているなと思いました。実はグラベリマというコメ、アフリカの、言ってみれば現地米なのですが、このコメが今どんどん増産されていますし、輸入米も増えていて、コメの消費量そのものが増えているのです。人々は畑に出て、イネを作るよりも、精米の輸入に血道を上げ、そして精米業に走るのです。ここで働いていた連中をつかまえて話をしたのですが、ちょっと暗くて歯しか見えないかもしれませんが、3人の若者が居て、「誰がこの精米機使えるのかな？」って話をしたんですけど、誰も使えないのです。「誰が、給料もらってるのかな？」と尋ねたら、（画像の）真ん中にいる一人だけなのです。どうして給料もらえている

のかというと、精米の番をしているからなのです。この精米所は小売りをしているわけではなくて、卸売業者が買い付けに来るわけです。

そこで彼らが胸を張るのが「これはストーンフリーのコメだ」ということなのです。つまり、ストーンフリーの意味するところは、文字通り小石が混ざっていないということです。炊いて食べてもガリッとこないのが大事なのです。われわれのように精米歩留まりなどは関係ありません。小石が混ざっていないというだけで、みんなが喜んで購入するわけです。

ナイジェリア中部の農村部で、彼らのような仕事を得られるというのは非常にまれなことなのです。画像に映っている他の2人も、手伝ったっているということで少しは分け前をもらっているのでしょう。意外かもしれませんが、この人たちの仕事は、アフリカ社会の文脈では十分にディーセント・ワークなのです。

ところが、（次の画像のような）若者たちも居るわけです。身なりもTシャツにジーンズと大体似たようなものですが、道路沿いでちょっとした品物を売りさばっている人たちが結構居るわけです。いつ足を止めてくれるか分からない車の客を待っています。途上国の都市部で皆さんが見掛けるような、ベンダーとか、ホーカーとはちょっと違った印象で、とりあえず待っているわけです。売っているものいろいろですが、農村部では、大体そこで売れそうな物を持ち出してきた、若者たちが日がな1日ここに居るわけなんです。珍しい物なら買ってくれるということで、（この画像では）いわゆる「ブッシュミート（野生動物の肉）」を商っています。（この画像では）ちょっとグロテスクなりザード（トカゲ）とか、野生の鳥とかを売っていました。よく焼けてる所だけをちょっと持ってきて岩塩を付けて食べるのですが、結構値段は張ります。「ブッシュミート」は現地の人たちにとっても非常に貴重ですし、今や援助機関ですらこのブッシュミートを活用して動物性タンパクを供給しようとしていますので、その意味でも決して無視はできません。ただし、この商売がディーセント・ワークと言えるのでしょうか？画像の向こう側に居らぶ数人の若者は売り手で、結構実入りがいいので、古着ですけれどもTシャツなどが買えているのだと思います。ただし、若者たちにとっての不満というのは、仕事が不満、あるいは実入りが不満というよりは暇過ぎるのです。退屈であることつまり、仕事に喜びを感じないということなのです。さて、彼らの仕事はディーセント・ワークと言えるのでしょうか？やはり、考え込んでしまいます。

農村部でも、先の画像のように沿道で売るよりは、「モーター・パーク」とも称される、乗り合いの自動車、長距離のバスがやってくるような所に行けば、もっといろいろ売れるものはあるのです。（画像のように）長距離バスが止まると、売り子たちがいろいろな物を売りに来ます。果物であったり、あるいは「スナック」の落花生であったり、あるいはちょっとおなかを満たすものであったり、画像ではパンを打っています。画像にあるのは、ちょっと小ぎれいな「モーター・パーク」ですが、ここに行って働くというのは、実は村の若者にとってはちょっとしたステータスになります。もちろん実入りがよいかといえば、親方から品物を預けられて「売り切るまで帰ってくるな」と言われているわけですから、決して楽な商売ではないわけです。けれども、確実に売り上げがありますから、そういう点では、現金稼得としては意味があるのでしょうか。同じ「モーター・パーク」にあるバーに行くと、やはりそこには若い

人が居て、ビールなどを飲んでいたりします。人の集まる所であればカネも動きますし、物も動きます。だからこそ稼ぎになり、仕事があるということなのです。何よりも小ざれいですから、楽な商売ができるかもしれないと若者たちは思うのでしょう。

われわれにしたところで、きれいなオフィス、夏は涼しいオフィスで働きたいと思うので、ナイジェリアの若者たちにそういう願望があっても不思議ではありません。ただし、そこで問題になるのは、チャンスがそうそうはやってこないということです。また、仕事としての不安定さにおいては、先ほどの精米所とか、ロード・サイドで何かを売っている若者たちとそれほど変わらないということ。せつかく仕事を得ても、すぐにチャンスは失われるということです。競合者も多い中で、ディーセント・ワークというものは、実際どこにあるのでしょうか？ ということのをわれわれとしても考えなければいけないのではないかと思うのです。若者を取り巻く状況というものを、もう一度考え直さなくてはいけないのではないかと、この若者の問題に取り組んでから考え直しました。人類学者の友人に話を聞いたりもしながら、アフリカの若者を取り巻く社会状況、あるいは社会の仕組みを少し学ばせてもらったのですけれども、幸いにも、われわれの社会の経験もアフリカの経験とすり合う部分が少なくはないのです。何となく宮本常一の『村の若者たち』とか読んでいたりして、通じるものがあるというふうに思うところもありました。特に地域社会（コミュニティ）における年齢階層の問題、つまり世代区分の問題があるのです。そういうものは、われわれの社会にもあって、日本の伝統社会における「若者組」とか、「若者宿」みたいなものがアフリカ社会だけではなく、さまざまな国・地域の伝統社会の中にもあって、それが若者たちにとっては大人になる階梯であり、社会の中で認められていくステップになるわけです。この age-group、年齢集団間の序列関係というのが実は大切で、場合によっては若者たちにとっての足かせになったりもするわけです。特に同世代のライバルになる人たちが早く死んでしまう、多産多死の社会であれば、彼（女）らが地域社会の中で何らかのステータスを獲得するという可能性は高かったわけですが、現在は多産少死に移行しつつありますので、村落には子どもも若者もあふれています。

そんな社会状況の中で彼（女）らが地域社会の中での序列を高めていくという確率は、非常に低くなっていると考えられます。当然ながら、伝統社会のさまざまな祭祀、儀礼、伝統行事なので役割を果たしながら、地域社会の中で認められるということを考えるわけですが、それはなかなか難しい。こうして、いわゆる age-grade、年齢階梯というものを上れない若者たちが増えてくるわけです。

かつて2度、ナイジェリアの南西部にあるラゴスという都市に滞在しました。人口1000万超の、アフリカの中でも特に人口が多い街なのですが、そこで時々、嫌がらせをされるわけです。外国人がやってくれば、カモが来たと思っているわけですから、嫌でも付き合わなくてはならないので、そういう連中とも話しをしていました。決して金を払ったりはしませんでした。30代や、40代の連中が次から次にやって来るのです。それでは、周りにいる人たちが彼らを何と呼んでいるかということ、それがなんと「ユース」なのです。年かきで、「ユース」という呼び方には違和感もありましたが、彼らは地域社会から認知されていないのですよ。そういう連中が、「ユース」と称されるわけで、中には「ボーイ」と言われている者までいました。ラゴ

スには、石原慎太郎的な表現で言えば「愚連隊」みたいな連中が、徒党を組んでいるのです。ナイジェリアでは、こういう連中を「エリアボーイズ」というふうに呼んでいます。この「エリアボーイズ」の中には、それこそ40代の半ば、あるいは後半ぐらいの連中がごろごろ居るのです。つまり、地域社会からはじき出されたというか、はみ出してしまって居場所がない連中、それが若者たちと徒党を組んでるわけです。彼らは、若者を脱するための条件が整っていません。カネもなければ、家もない。配偶者も居なければ、家族も居ない。もちろん、そうならざるを得なかった事情があるわけです。とりわけ地域社会が壊れてしまった都市では、いよいよ彼らの行動が放埒なものになってしまいます。当然ながら、彼らにとって残されているもの、残されたリソースは、腕力、ないしは暴力だけなのです。もちろん腕力がなくても暴力は行使できますから、そんな連中を、われわれはどう扱ったらよいのでしょうか。ナイジェリアでの2度の生活の中で、それをすごく考えさせられました。

地域社会を取り巻く状況を少し整理してみたいのですが、人口増加による地域社会の膨張というのが、やはり一番大きいと言えるのではないのでしょうか。先ほどから申し上げているとおり、多産少死社会への移行、そして過剰人口の滞留の中で、出口がない、抜け出すことができないということが一つあると思います。それから、地域社会の経済的疲弊ということも大きいと思います。ナイジェリアのみならず、アフリカの多くの国々は、1970年代の2度の石油危機を引きずった形で、80年代以降の経済停滞に陥ってしまいます。国家の累積債務がかさむ中で、構造調整というものを受け入れざるを得なくなり、経済的に疲弊していきました。そのような中であって、地域社会も極めて厳しい状態に置かれていたということなのです。

行政サービスが社会の隅々にまで及ばないというのは、多くの途上国が直面している問題ですが、アフリカ諸国のような途上社会には、それどころではない部分もあります。つまり、人々の生活が浸食され、壊れていくということです。それは、例えばわれわれの社会であればインフラの劣化によって生活のリスクが高まっていくという問題があり、例えば橋梁の老朽化というものを、われわれは非常に心配しています。けれども、アフリカ諸国ではそういうレベルの問題にとどまらないわけです。それこそ、幹線道路ですらきちんとした維持・補修が行われなくなってしまった中で、とにかくコミュニケーション（運輸はもちろん、通信も含めて）が途絶えてしまうわけです。それでも、道路網の整備がなされていれば、若者たちもそういうものの便益に浴するチャンスもあったのですけれども、そうしたものも確保できなくなってきてしまいました。それは過剰人口というだけではなくて、そこに滞留していく人たち、いわゆる滞留人口というものが非常に大きくなったのだということです。

若者をめぐる社会状況の変化ということではこの問題が一番大きいと思われるのですけれども、たとえば教育水準の低下によって若者が被る問題もあり、さらに先ほどから言っている経済的機会の減少、つまり就職難もあります。とは言え、やはり何よりも大きいのは、社会的な地位が認められないことではないと思います。彼（女）ら若者が社会から認知されない状況が生じてしまっていることです。それを深刻に捉えないと、彼（女）らをめぐる雇用ばかりではなく、彼（女）らの社会生活というものが非常に危うくなってしまうと考えています。

ナイジェリアの統計局が出している失業率についてですが、地域的にきわめて大きな偏差が

あります。決して人口密度が低い所が失業率が高いわけではなくて、人口密度の高い所も低い所も関係なく、地域によってさまざまな地域社会の問題を抱えていることによる、失業率の高さというのが非常に際立ちます。そんな中で若者が社会に対して大きな不満を抱いていること、そして、彼らに残された唯一のリソースというのが暴力であるということを真剣に考える必要があります。なぜなら、それが犯罪化、あるいは社会のさまざまな困難というものを引き起こしているからです。われわれが何よりも恐れているのは、彼（女）らが政治に巻き込まれてしまうことです。なんらかの形で政治的操作されてしまうということを、深刻な問題として受け止めるべきだと思います。

今日のお話の中で事例として取り上げているものも幾つかあるのですが、都市の若者、とりわけストリートで暮らす若者たちが徒党を組んで、例えば公道で反則金を要求するとか、市場で「みかじめ料」を取るといった、かわいらしい犯罪に走るぐらいはいいのですが、社会の中であぶれてしまい、失業という言い方では片づけられないぐらいに、何もかもを失って、最後のよすがとして暴力に奔ってしまうときに何が起こるのだろうかと考えてしまうのです。それは人口の問題でもあり、雇用の問題でもあるとは思いますが、ナイジェリアの現実には暴力集団というか、武装集団までも生み出してしまっているのだということを重ねて指摘しておきたいと思います。

ここで取り上げたのは、ナイジェリアの石油の産出地域、つまり石油という富を生み出している地域なのですが、実を言うとこの地域こそが同国の中では最も貧しい地域の一つなのです。そういうことをふまえて考えなくてはいけないのは、国家を支えているのが装置産業という雇用を生まない産業であり、ずっと寄財政収入の7割、外貨収入に至っては9割以上を、石油あるいはガスに寄り掛かってきた国なのということです。そこに生まれた若者たちが不満や不安を抱き、政府や、あるいは石油企業に対して異議申し立てを行い、さらに強く反発していくという事態が起こったのだということを、この事例で紹介しようと思いました。

（画像にある）この男は、Asari Dokubo というのですが、彼こそは今日お話ししようとした若者の典型なのです。裕福な家で生まれたものの、大学中退で高等教育からドロップアウトし、政治への進出にも失敗する。そこから若者集団の中に身を投じるのですが、そこでの内部抗争に遭って、より急進的な行為に奔っていった人物です。しかし、結果的に彼がどうなったかという、武装闘争の末に2年間収監されるのですが、収監期間が終わって出てくるや、今度は政治に巻き込まれていきました。先ほど言った、政治家による操作ということが、ここでもはっきり見て取れます。

少し急いでしまいましたが、まとめに入りたいと思います。今日、皆さんに提起した問題というのは、特にアフリカの若者に限りませんが、世界の若者たちがディーセント・ワークというものを希求しているということなのです。2000年代、とりわけ2007年以降に襲ってきたUnemployment Crisisという状況、その中にあった若者たちが経験してきた人口増加と雇用という問題を考えると、実これをすぐれて若者のそれというわけにはいかないわけです。なぜならば、若者といわれている15歳から24歳という世代よりも、さらに上の世代にも同じ問題はありますし、現金稼得ということで言えば、もっと年齢の低い世代にも関係するか

らです。アフリカ社会では15歳以下の子どもたちもまた家族の中でお金を稼ぐ非常に重要な存在になっています。つまり、若者とその上下の世代を含めて、この問題を考えていかななくてはならないということです。従って、若者世代の問題として、それを切り取って扱うわけにはいかないのではないかと考えています。とは言いながら、若者をめぐる問題を放置してしまえば、先ほど例に挙げたような犯罪化、あるいは暴力化を招いてしまいかねません。それらの解決というのは、いよいよ困難な問題になってしまうかもしれません。

この勉強会で、これから追求されるポスト MDGs、そして SDGs ということを視野に入れるならば、本日提起させていただきました若者をめぐる問題を含み込んだ Goal というのは、おそらく Goal 8 と、あと幾つかの Goal の中に紛れ込んでいると言わざるを得ません。しかしながら、そういったものが今後、17 の非常に広範な Goal の中で追求されていく中では、この若者めぐる問題だけを切り取ることはできないのかもしれませんが、そこに注目することにより、人口、雇用というだけではなく、ポスト MDGs の問題を考えなくてはならないのではないか、というふうに考えています。前座の問題提起になったかどうか、分かりませんが、以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

山田 望月先生、どうもありがとうございました。

(了)